

花織の里



人間国宝・名誉村民
よなみねさだ
與那嶺 貞氏
1909年1月20日生
2003年1月30日没

1964年読谷山花織の復興に成功。1975年沖縄県指定無形文化財技能保持者となり、1999年に人間国宝に認定されました。当時の池原昌徳村長の強力な後押しを得て花織の復興に着手、沖縄県女子工芸学校で学んだ技能を駆使し、地機(じーばた)から高機(たかはた)への切り替えに成功、複雑な文様の技法化と共に今日の花織の礎を築きました。

伝統が育む可憐な花を織る

読谷山花織の歴史

一四世紀後半、琉球の大交易時代に東南アジアから伝わったとされる読谷山花織は、細かな点と線の幾何学模様で可憐な花を織り出しています。世界をまたにかけて繰り広げられた交易の成果として、不思議な魅力に包まれる花織、まさに海のシルクロードを渡ってきたのです。しかし、明治期にその技術は一時途絶えてしまいました。

村に残る花織のウツチャキや織っているところを見たことのあるというお年寄りのかすかな記憶を手がかりに、與那嶺貞氏は自らの織物理論を駆使し、多くの試行錯誤の中から一九六四年見事に復興に成功しました。

その後、一九六九年花織愛好会を設立、一九七五年沖縄県指定無形文

化財に指定、一九七六年読谷山花織事業協同組合設立、同年六月、通産大臣指定の伝統的工芸品となり、そして一九九九年「読谷山花織」が国の重要無形文化財に指定され、その保持者として與那嶺貞氏が「人間国宝」に認定されました。

二〇〇二年に読谷山花織から「染め」で新垣隆氏が「現代の名工」の認定を受けています。

特徴と技法

読谷山花織は、紋織の一種で浮織です。白、赤、黄、緑等の糸で織り出されている紋様は花のように美しく情熱の織物として知られています。

花織の技法は、花綜統(はなそうごう)の織り方と手で差し込みながら織る手法(縫取織)とが併用した織物で、それは、沖縄では一番古く、紋織の発祥の地とされています。

現在、伝統工芸センターや村内三箇所の地域工房、各家庭で心を込めて織られています。



読谷山花織の新商品

読谷村伝統工芸センター

読谷村伝統工芸センターは、1981年に建設され、後継者の育成や共同染色、製品検査などをとおして生産性の向上や普及宣伝、さらに協同組合の事務局として重要な機能を担っています。また組合では組合員の協力のもと新たな製品開発、販路の拡大など伝統工芸品の振興に努めています。



座喜味森城 御万人の情
読谷山花織や 母のこころ

染め

可憐な花柄は、フクギやヤマモモの黄色、ティカチやゲールの茶色、緑色は琉球藍と黄色染料の重ね染め、草木染を用いて表わします。深みのある紺の地は琉球藍で染められています。

染めは、染材を煎じたもので何回も繰り返し染め、独特な色相を出します。

織り

花柄はジンバナ(銭花)、カジマヤー(風車)、オージバナ(扇花)の3つの基本花とする30種余の幾何学模様で織り、これに緋や縞、格子の加わった模様となっています。



紅型

型置きから染め上がりまで



1 青色の糊を置いて型附をしたところ。



2 白く残った部分に色を差す。



3 さらに隈取をする。文様のフチなどに別の色で罫しを入れることによって、文様がより鮮やかに引き立つ。



4 糊を落とししたところ。



5 地染めをする場合は、文様に糊を伏せて地を染め、再び糊を落として完成。

紅型で一九九六年に国指定重要無形文化財「紅型」技術保持者(人間国宝)に認定された玉那覇有公氏が二〇〇〇年に東シナ海が一望できる瀬名波の地に紅型工房を構え、首里工房と併せて意欲的な創作活動を展開しています。



玉那覇有公紅型工房



人間国宝・名誉村民 玉那覇 有公氏
1996年 国指定重要無形文化財「紅型」技術保持者(人間国宝)に認定

